

# 英語教育大変革の時代に

伊東 琢磨

## 1. 我々を取り巻く環境は…

高度経済成長期を終え、バブルや失われた20年を経験し、超高齢社会を迎えた日本はどのようなのでしょうか。まず、人口減少により国内市場規模は縮小し、戦後日本が歩んできた大量生産・大量消費のビジネスモデルは成立しなくなります。それならば、と安直に「人口ボーナスのある海外市場を目指す」のも、既にその戦略は他国と競合していて先が見えません。まだ十分に戦える分野もありますが、日本の家電メーカーが大きな方向転換を余儀なくされているのはご存知の通りでしょう。

また、日本は先進国の先頭を走って超高齢社会と向き合わねばなりません。日本ほどの経済規模と人口を抱えた超高齢社会は他にありませんから他国を参考にしたいと思ってもうまくいきません。増加の一途をたどる医療費、要介護者、介護の担い手の高齢化などにどのように対応していくべきでしょうか。

このように、どの分野でも自分たちで解決していかなければならない問題が山積しています。今後日本の進むべき道はどのようなものなのでしょうか。

経済の分野では、「農作物のジャパンブランド化、クールジャパン戦略など、新しい価値を創造して世界に市場を開拓する」「今日本にあるシステム、新幹線の建設・管理運営システム、上下水道管理システム、地上デジタル放送システムなどを海外に丸ごと輸出して、それに伴う物品、施設設備、管理ノウハウを総合的に扱う」「アジアだけでなくアフリカの市場開拓を目指す」「観光立国日本を目指す」など、現在日本が取り組んでいる方策は数多くあります。

超高齢社会対策では、介護保険料負担率の見直し、介護職員の給与改定、医療介護分野への外国人労働者の限定的な参入、社会保障制度の見直しなどが行われようとしています。

これらの問題に対して、こうすれば必ずうまくい

くという「正解」はありません。我々は「正解」のない問いに対してよりよい解決法を模索していかなくてはならないのです。

## 2. 現代に求められる人材は…

大量生産・大量消費の時代に求められていた人材は、工場や組織の歯車となり一生懸命に与えられた役割を果たす人材、古い表現では「モーレッツ社員、企業戦士」といったところでしょうか。つまり、頭の中に多くの情報が蓄えられていて、その情報を活用し、与えられた仕事を素早く正確に処理できる人材です。こうした人材を育成するために、「正解」のある問いをたくさん演習して、できるだけ早く処理をする訓練を各科目授業で行ってきたのです。

時代は大きく変わり、私たちは大量の情報に携帯端末を通して簡単にアクセスできるようになりました。その情報が正しいかどうかを精査する能力があることが前提にはなりますが、頭の中に多くの情報を詰め込んでおくことの優先順位は以前ほど高くなり、違う能力が求められるようになりました。

情報が溢れている現代に求められるのは、「仕事（タスク）を実行する」ために「どの情報が必要か」を判断し、「どのように情報を取得するか」を知り得て「情報を収集」し、「得られた情報の真偽を精査」し、「どのように活用」して、「目標を達成する」のかを知り、「他の人と協働」して実行する能力です。大量の知識を詰め込むよりも、大量の情報の中から、何をどう収集し、どう活用するかに焦点が移行しています。

しかし、今までに求められていた力が必要なくなったわけではありません。今まで通り、基礎基本の定着は絶対的に必要です。さらに、本当に必要なものを吟味して取捨選択することが求められます。それらの精査に加えて、新しい時代に適応するための能力が求められているのです。

今我々の目の前にいる生徒たちが活躍する社会はどんな社会になるかをイメージし、どのような能力を身につけたら、社会に求められ、生きがいを感じ、日本の社会や世界に貢献できるような人材になれるのか、と考えることが肝要なのです。

### 3. 今現場で何が求められているか

今、学校現場で何が起きているのでしょうか。2年後にはセンター試験に替わる新テストを受験する生徒たちが入学してきます。新しい学習指導要領の改訂に向けてのヒントは、平成27年8月発表の中央教育審議会教育課程部会教育課程企画特別部会の「論点整理」に詳しいのですが、その提言を踏まえて学校全体のカリキュラムを整理し直そうとしている学校もあれば、その流れに乗れず漫然と過ごしている学校もあり、対応はさまざまでしょう。どちらにしても、もう1年しか準備期間はありません。では、何から始めたらよいのでしょうか。

「何が何でも偏差値のよい大学の入試に対応できる生徒を育てる」という今までのいわゆる「正解」を追い求めるだけでなく、違う観点の導入こそが大切です。求められる能力を身につけさせるカリキュラムを策定し、実践したら「結果として」新テストに対応できましたとなれば理想的でしょう。

近頃、後述するアクティブ・ラーニングとセットでよく耳にするようになったカリキュラムマネジメントが求められています。これは従来のように各教科がそれぞれ別々に目標を設定して進んでいくのではなく、教科の横断的な連携(横軸)と学年進行(縦軸)を考えながら、この能力を伸ばすためには、この時期に、どの教科で何を、その後別この教科でどう指導するかといった3年間の全教科の設計図を作成し、教育活動を行うことです。

そこには、最近流行の「アクティブ・ラーニング」、すなわち「発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習など」や「グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク」や「ICT機器の利用」など、SGH、SSH、SPH校といった指定校で先進的に研究、実践された指導法なども含まれることになるでしょう。

これらの取り組みは、英語科だけの問題ではなく、学校全体の問題であるという認識が必要です。まずは、我々の認識を変える、それこそが求められてい

るのです。

### 4. 認識をどのように変えるか

時代の変化に応じて認識を変える必要がある、との考えは多くの先生方に共有されていると思います。が、具体的にどのように変える必要があるのでしょうか。ここでは2つお伝えしようと思います。

1つ目は、教育効果を測る観点についてです。生徒の持っている能力を伸ばすといっても、目に見える形で測ることはなかなかできません。だれの目にも明らかになるわかりやすい成果といえば、難関大学、国公立大学の合格者数や模試の平均偏差値といったものです。こうした画一的な尺度だけでなく、独自のルーブリックを設定し、それに基づいた教育活動を行っている学校はまだそこまで多くはないでしょう。現在、英語科でもCan-Do-Listの本格導入が始まっていますが、こうした多様な観点からの到達度評価を取り入れて、大学合格者数、偏差値、到達度評価のいずれも必要に応じて使うという認識に改める必要があります。

2つ目は、我々自身が「正解」を求めてしまうことについてです。私は「All Englishでの授業」「ICT機器を活用した授業」に早い段階から取り組んできたこともあって、他の先生方の前で話をさせていただく機会に恵まれてきました。その際に「うちの生徒では…」「やってみたいのだけれどその環境がないから…」「教科書がそのような作りになっていないから…」「大学入試があるから…」といった意見を耳にしてきました。確かにどのご意見も現場の一教師として共感できる内容ですが、ここにこそ一番の問題があると思っています。こうすれば絶対成功するという「正解」などありません。新学習指導要領に掲げられるであろう「正解のない問いに対するよりよい解決法を模索し続ける力」が我々教員にも求められています。激変しつつある英語教育の大きな課題に真っ向から立ち向かって、他の先生方と協働して解決策を模索し続けるという認識を共有する必要があると思います。

### 5. 認識が変わると何がかわるか

では、認識が変われば何がかわるのでしょうか。

1つ目の教育効果を測る観点については、大学合格者数や偏差値ではない評価を取り入れるとなると、

学校全体がどのような生徒を育てるかという観点からそれぞれの教育活動、各教科の授業をデザインし直す作業が必要になります。今でも修学旅行や体育大会、大掃除や芸術鑑賞会、オープンハイスクールなどの学校行事はそれぞれに教育目標やねらいが設定されて運営されていますが、それらも全て生徒のどの能力をどこまで伸ばすための教育活動なのかをしっかりと位置づけし直すのです。

「意見をまとめて発表する」という能力の育成を例に考えてみます。1年生の社会科で現代社会の課題について学習を行い、情報科で情報の扱い方を学習して必要な情報を収集し、総合学習で集めた情報を他の生徒と共有してグループ討議をし、国語科で意見を個人でまとめ、英語科で日本語で表現された意見を英語で表現し直し、オープンハイスクールなどの機会中学生や地域住民の方たちの前で発表する、という一連の流れが年間を通して計画できます。2、3年生でも、各教科、総合的な学習の時間、学校行事を連携させて、引き続き小論文の指導へ発展させたり、討論、ディベートの手法を各授業で取り入れたりするなどすれば、3年間で「意見をまとめて発表する力」は育成できます。

これを実施するには教職員間の連携が必要ですが、教職員がその目的と評価の観点を共有できれば、自ずと行事や授業も精査され、内容も改善されると思います。

英語の授業に焦点を当てると、定期テストの点と課題の提出点、小テストの得点だけで評価するのではなく、自然にパフォーマンステストが導入されることになるでしょう。また、正解だけを覚えれば点数が取れるテストも自然と減ってきます。「正解」が1つに決まらないテストは、採点基準を統一することに骨を折りますが、評価の観点を明確にしてシンプルに評価すれば公平性が失われることはありません。定期テストやパフォーマンステストが4技能を測るという観点から作られるようになると、外部検定の導入がスムーズに進み、センター試験に替わる新テストにも対応が可能になります。

2つ目の「正解」を求めてしまうことについてですが、我々の姿勢が変わると授業は自然に変わります。

授業には「不易と流行」があります。ですから今までの授業のやり方の全てを否定する必要はありません。

言語習得の観点からすると「不易」とは「基礎基本を徹底的に詰め込む」ことであるのは明らかでしょう。ですが、「基礎基本の詰め込み方」には「流行」があります。文字だけで処理していた時代が長く続き、音声も必要だから音読を活用しようとなり、視覚も使えばもっと効率的になるからとICT機器の利用が促進されている、というのが現在までの流れでしょう。実際にICT機器を利用するようになってかなり経ちますが、生徒の顔は上がるようになりましたし、電子教科書も随分と改良されて、音読、シャドウイング、オーバーラッピング、簡易穴抜きなどの活動が簡単にできるようになりました。こうした活動を通して、基本例文や音声の定着度は上がり、生徒は常に何か作業をすることになり、講義調の一方的な授業から自然に変わっていききました。

「詰め込む内容」については、実生活に使える「身近なこと」から徹底的に詰め込み、自分の考えを表したり議論したりするのに役立つ表現へと広げていくと効果的です。現学習指導要領に忠実に作られている英語表現の一部の教科書は、身近でよく使われてかつ文法的にも比較的習得しやすい順番に、自己表現に必要な表現を並べています。これらをうまく活用すれば、同じ「詰め込み」方式でも方法と内容で工夫ができ、4技能をバランスよく指導することができます。

こうして、認識が変化すると自ずと学校全体、授業の在り方そのものが変わってくると思います。

## 6. アクティブ・ラーニングについて

アクティブ・ラーニングとは、文科省の定義によると「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的な能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。」とされています。

さらに、教育課程企画特別部会の論点整理によると、我々教員が次のような視点を持ち、指導法を改善することが求められています。

- ①習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程を実現できているかどうか。
- ②他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか。
- ③子供たちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかどうか。

授業でトライする活動がこの3つのポイントを満たしているかどうかを確認しながら進めてみると迷わずにすむかもしれません。

アクティブ・ラーニングを利用する目的は「基礎基本を徹底して詰め込んだ先」にあるものだと思います。「判断する基準を、自分の経験や得られた情報から自ら考えて導き出す」ということがベースにあるからです。ですから適切な準備ができていない中で「ペアで考えてみなさい」「グループで考えなさい」と野放しにしても、なかなか思うような効果は得られないでしょう。

以下は、私が授業で実際に行ってみた活動の一端です。様々な文法分野を超えて以下のように例を数多く出し、自分たちで分類させ、ルールを見つける作業を複数の人間でさせてみました。

- 1) A cute dog                      A dog is cute.  
 A running dog                    A dog is running.  
 A chained dog                    A dog is chained.
- 2) He is in the garden.  
 I am on my way home.  
 He lives in Kobe.  
 He went to the station.  
 I arrived at the station.  
 I will take you to the station.
- 3) I am happy.  
 I am singing a song.  
 I am interested in playing football.  
 I am going to sing a song.  
 I am able to sing a song well.
- 4) He studies English.  
 He studied English.  
 He must study English.

- He must have studied English.  
 He seems to study English.  
 He seems to have studied English.  
 If it were not for an English dictionary, I could not study English well.  
 If it had not been for an English dictionary, I could not have studied English well.
- 5) I love eating tomatoes.  
 I love to make cakes.  
 I know a girl standing by the window.  
 I have something to talk to you.  
 Seeing you, I called your name.  
 To see you, I went to the station.

答えを教えるとすぐに終わりますが、どのように答えにたどり着くかを考えるように導きます。自分たちで考えて見つけ出したルールなら印象に残ります。自分たちの力で答えにたどり着いたように思わせられると成功でしょう。

この活動をするためには、生徒の思考の軌跡を逆トレースして、必要なサポートが何かを考える必要がありますが、何回か実践して生徒の反応をみると慣れてきます。

## 7. 最後に

国は、明治以来最大の教育改革を本気でやろうとしています。こうした流れの中で「知識の伝達だけ」でなく、「なぜ学ぶのか」「何を学ぶのか」「どのように学ぶのか」「学んだことをどのように使うのか」を指導できる力量を持った教師になることが求められています。

私自身、英語そのものの持つ魅力や可能性を生徒に伝えきれているか、常に自問しています。英語学習は「地道な努力をし続ける力」や「学びに対する終わることのない姿勢」を養うことにも有効です。一英語教員として、これからの英語教育に求められることは何であるのか、それをどのように実現させていくのか、「正解」のない問いの答えを模索し続けることが、生徒にも同僚の先生方にも、そして自分自身にとってもよりよい「結果」につながると信じ、精進し続けたいと思っています。